

## 第3章 中学校における授業実践とその分析

### 第1節 デジタルカメラによる作品制作において擬態語を用いた中学校美術科 授業実践1

#### A 授業実践の目的と概要

本授業実践は、中学校美術科の制作過程における生徒の「体験」に注目し、言葉と感覚的な経験との結びつきが作品に与える役割について明らかにすることである。そのため、言語利用として擬態語を用い、言葉とイメージの結びつきについて、生徒の発話より分析する。

授業の概要は、次のようになる。

- 題材名：「ことばの世界を写そう」
- 実施年：平成23年7月
- 対象：三郷市立H中学校第1学年
- 人数：2クラス 各クラス，男子女子合計25名
- 指導時間：全4時間
- 実施場所：三郷市立H中学校校内
- 使用媒体：デジタルカメラを利用する
- 授業者：西園政史

#### B 授業実践の計画と展開

学習指導案 中学校第1学年(4時間扱い)

日時 平成23年7月5日(木曜日)第6校時  
7月12日(木曜日)第2校時  
7月19日(木曜日)第2校時

7月26日（木曜日）第2校時

場所 三郷市立H中学校

学年 1年（男子女子合計25名）

## 1. 題材名「ことばの世界を写そう」

## 2. 題材設定の理由

中学校第1学年の時期の生徒は、様々なことに対し美意識を持つようになる。例えば、制服の着こなし方や筆箱やその中身に個性を持つようになる。生活における興味が、自己表現として現れ、他者との差別化や共有化へとつながる。そこで、美術と生活とがつながりを持ったものであることを、より意識させるための題材を設定する。

本授業では、デジタルカメラを利用する。デジタルカメラは、生徒にとって身近に存在する美術表現媒体である。そこで、学校内で発見できるものを対象とし、ものの質感をデジタルカメラで撮影する。対象へのアプローチとして擬態語（ごつごつなど）を利用する。擬態語から感じられる質感を通し、そのものの持つ質感を感受し作品に反映させる。さらには、質感が日常的に存在する自然な感覚であることを認識させる。擬態語を介して写真撮影を行うことで、多くの質感を体感しその感覚の幅を広げていき、言葉と質感とのつながりを構築するなかで、美術表現が発生することを認識する。

説明のための撮影ではなく（例えばリングを撮影することを目的とする）、形のない擬態語からイメージしたものを撮影することで、イメージすることを意識させることが可能となる。このことは、豊かな表現力を養うことにつながる。

### 【教材観】

様々な質感を知ることで、美術作品への強い関心を持たせる。さらには、その質感を利用して表現の幅を広げる。日常生活でよく利用されるデジタルカメラを使うことで、写真を利用した美術作品がより身近なものであることを認識し、創作意欲を引きだす手助けとなる。

### 【生徒観】

中学校第1学年という時期は、様々なことに興味を持ち、新しいことに強い関心を示す時期である。表現媒体として幅を与えることで、新たな表現力を獲得し創作活動に刺激を

与えることにつながる。他者との関わりでは、価値観の違いによって絶えず摩擦を繰り返す、社会性とそのなかで生まれる個性を獲得することになる。

#### 【指導観】

今回の授業では、質感と言葉〈擬態語〉とのつながりを築き写真作品によって表現を行う。さらに、言葉の入り口より、五感によって質感を感受し、撮影対象を捉え、グループのメンバーとその感覚を共有することを行う。学校生活の中にある様々な質感を発見し他者と共有することで、共通認識を築き、他者や日常とのつながりを構築する。

### 3. 指導目標

- 鑑賞、批評し合うことで表現の違いを知り、互いの意欲を高め合う。【関心・意欲・態度】
- 身のまわりのものに対し、日常とは異なる視点を持ち、豊かな発想で質感の違いを見つけ作品としてつくり上げる。【発想・構想】
- デジタルカメラを利用し質感と色を感受し、言葉より捉えた表情を作品化する。また、独創性のみを重要視するのではなく、他の児童に伝えることも意識する。【技能・表現】
- 美術作品をつくるという視点においてデジタルカメラの利用方法を理解する。日常の場にある様々なものを質感として捉えることができる。【知識・理解】

### 4. 指導計画（全4時間）

- 第1時 カメラの使い方、擬態語の説明をし学校内での撮影を行う。
- 第2時 撮影した写真から新たな発見をし、さらに印刷された写真を切り貼りする。
- 第3時 切り貼りされたものに模様が入った透明フィルターを重ね、再度デジタルカメラで撮影をし写真作品にする。
- 第4時 完成した作品を鑑賞する。初めに、自身が制作した作品を観て感じたことを記入させ、続いて、他グループの作品を鑑賞する。

### 5. 第1時の目標と展開

#### 本時の目標

- ①カメラの使用方法を理解し、写真を撮る。
- ②グループで協力しながら新たな質感を発見し出会う。
- ③目に映る情報だけではなく、触覚、音、動きなどから質感と色の探究を行う。

(5) 準備

〈教諭〉 グループで一台のカメラ，学習ノート，擬態語の書かれたカード

〈生徒〉 筆記用具

(3) 第1時の展開

展 開	時 間	指導者の活動	生徒の活動	指導上の留意点
導 入	5 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ（自己紹介）</li> <li>・本時の内容を説明する 「皆さんにはカメラを使って色と質感の発見をしてもらいます。まずこちらを見てください。」</li> <li>・黒板に書かれた「ごつごつ」から連想されることは何か質問し，答えさせる</li> <li>・複数回答が出たら参考となる写真を例示する 「先生は，ごつごつという言葉からこのような写真を撮りました。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・席につき説明を聞く</li> <li>・「ごつごつ」から連想されることをイメージし答える</li> <li>・写真と言葉のつながりを理解する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員が席に着くことを確認する</li> <li>・説明時に，イメージが固定化されないよう注意する</li> </ul>
展 開 I	10 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループに，言葉の書かれたカードと学習ノートを配付する</li> <li>・名前と言葉を記入させる</li> <li>・個人で，言葉を見て感じたことを記入させる</li> <li>・5分間，グループ内でその言</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉カード，学習ノートを受け取る</li> <li>・名前と言葉を記入する</li> <li>・個人で，言葉を見て感じたことを記入する</li> <li>・5分間，グループ（4人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由な発想で，言葉から受ける印象を伝えあえているか確認する</li> <li>・話し合いが止まってしまっているグループに対しては，例えとして身近にある物に触れ</li> </ul>

	<p>葉から受けるイメージについて意見交換させ、記入させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・以下の注意点を伝える</li> </ul> <p>○グループでイメージしたものをもとに、学校内で撮影するものを探し、良いと感じたものがあつたら、4人で同じものを色々な角度で撮影すること</p> <p>○触れる、音を聞く、動かすなどし、視覚以外で感じることも意識すること</p> <p>○撮影枚数は一人1枚とし、グループで計4枚とすること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カメラをグループに1台貸し出すと同時にカメラ番号を学習ノートに記入させる</li> </ul> <p>・黒板を使いカメラの使い方を説明する</p> <p>「では、まず電源を入れてみましょう。次にモニター画面を見ながらシャッターボタンを押してみましょう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・走らない、カメラは水につけない、落とさない、やさしく扱うなどの注意点を伝える</li> <li>・教室に集合する時間を伝える</li> </ul>	<p>1グループ) 内で、用意された言葉のイメージについて意見交換し、色々なイメージを持つ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・注意点を聞く</li> </ul> <p>・グループで1台のカメラを受け取る</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カメラ番号を記入する</li> <li>・カメラの使い方を聞く</li> </ul> <p>・時計を見て時間を確認する</p>	<p>たときの感覚を言葉にさせる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉は、「つるつる、ざらざら、ふわふわ、ぐちゃぐちゃ」とする</li> </ul> <p>・カメラの取扱について、しっかりと理解させる（撮影、プレビュー）</p>
--	--	--	--

展 開 Ⅱ	20分	・学校内（校庭，校舎内）で 写真撮影をさせる（雨の場合 は校舎内のみとする）	・学校内で，言葉からイメ ージされるものを撮影す る ・色々なところに目をや り，視線の角度を変えるな どし幅広く探す	・校舎，校庭で撮影さ せる ・雨の場合は校舎内の みとする ・一か所にとどまらず に，視点を上下させた りし，観察させる ・触れる，音を聞く， 動かすなどし，視覚以 外の感覚を使い質感を 感じるように伝える ・時間内に教室にもど るよう促す
ま と め	10分	・デジタルカメラで，撮影し てきた写真を確認させる ・カメラ，学習ノートを回収 する ・次の授業内容を伝える	・撮影してきたものを確認 する ・カメラ，学習ノートを提 出する ・次の授業説明を聞く	・戻ったグループごと に撮影出来ているか確 認する ・すべてのカメラ，学 習ノートの回収を確認 する

#### (4) 第1時の評価

- ①カメラの使用方法を理解し，撮影できたか。
- ②グループで協力し新たな質感を発見し出会えたか。
- ③目に映る情報だけではなく触覚，音，動きなどから質感と色の探究ができたか。

### 7. 第2時の目標と展開

#### (1) 第2時の目標

- ① 自身の撮影した写真を確認し，擬態語から得られた質感を読み取る。
- ② 撮影した写真をグループ内で鑑賞し，気がついた点を伝え合う。
- ③ 3枚の写真を切り貼りし，擬態語のイメージを構成する。

(2) 準備

〈教諭〉 生徒が撮影した写真を印刷したもの、学習ノート

〈生徒〉 筆記用具

(3) 第2時の展開

展開	時間	指導者の活動	生徒の活動	指導上の留意点
導入	5分	<ul style="list-style-type: none"><li>・前回の授業を振り返る</li><li>・再度、題材のねらいを伝える</li><li>・本時の流れを理解させる</li><li>・各グループに、自分たちで撮影した写真の印刷されたものを配付する</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・前回までの内容を確認する</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・題材を再度理解させる</li></ul>
展開Ⅰ	25分	<ul style="list-style-type: none"><li>・各グループで、印刷された写真を見ながら言葉のイメージが表現されたか確認させる</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・グループ内で、メンバーの写真を鑑賞する</li><li>・3枚の写真を切り貼りする</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・グループ内で自由な意見交換が行われていることを確認する</li><li>・写真を読み解くことを意識させる</li><li>・様々な考え方があつたことを理解させる</li></ul>
展開Ⅱ	15分	<ul style="list-style-type: none"><li>・3枚の写真を切り貼りし、デジタルカメラを使用し再度撮影し作品化させる</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・切り貼りしたものを再度デジタルカメラで撮影し作品化する</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・色や形について視点を持たせる</li><li>・気がついた点を自由に書かせる</li></ul>
まとめ	5分	<ul style="list-style-type: none"><li>・授業のまとめをする</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・話を聞く</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・日常的に面白い視点、豊かな世界を発見する喜びを伝える</li></ul>

(4) 第2時の評価

- ①自身の撮影した写真を確認し，擬態語から得られた質感を読み取れたか。
- ②撮影した写真をグループ内で鑑賞し，気がついた点を伝え合えたか。
- ③3枚の写真をコラージュ技法にて切り貼りし，擬態語のイメージを構成できたか。

## 8. 第3時の目標と展開

### (1) 第3時の目標

- ① 3枚の写真を切り貼りし，擬態語のイメージを構成する。
- ② 切り貼りしたものの上に模様入りの透明フィルターを重ね，より擬態語のイメージに近づける。
- ③ 質感を表現した写真作品として完成させる。

### (2) 準備

〈教諭〉 切り貼りされた写真，学習ノート

〈生徒〉 筆記用具

### (3) 第3時の展開

展 開	時 間	指導者の活動	生徒の活動	指導上の留意点
導 入	5 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前回の授業を振り返る</li> <li>・ 再度，題材のねらいを伝える</li> <li>・ 本時の流れを理解させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前回までの内容を確認する</li> <li>・ 本時の流れを確認する</li> <li>・ 前回の続きを行う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 題材を再度理解させる</li> </ul>
展 開 I	20 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前回到引き続きコラージュ技法を用いて，質感を表すように制作をさせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ それぞれ，作品を確認し前回の続きを行う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 擬態語から得られる質感の意識を再確認させる</li> <li>・ ハサミ等の注意を促す</li> </ul>



展 開 Ⅱ	15 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数十枚の質感を表す模様の入った透明フィルターから、自身の求める質感に適したものを選ばせる</li> <li>・選んだフィルターをコラージュした作品の上に重ね、デジタルカメラで撮影し作品化させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・透明フィルターから、自身の求める質感に適したものを選ぶ</li> <li>・選んだフィルターをコラージュした作品の上に重ね、デジタルカメラで撮影し作品化する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの模様の中から、自分の作品に適したフィルターを探させる</li> <li>・最終作品となるように、本日までにフィルターを重ねた状態で撮影する</li> </ul>
ま と め	10 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・片づけをさせる</li> <li>・授業のまとめをする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで協力して片づけを行う</li> <li>・話を聞く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで道具の数を確認し返却させる</li> <li>・作品の保管について伝える</li> </ul>

#### (4) 第3時の評価

- ① 3枚の写真をコラージュ技法にて切り貼りし、擬態語のイメージを構成できたか。
- ② 切り貼りしたものの上に模様入りの透明フィルターを重ね、より擬態語のイメージに近づけたか。
- ③ 質感を表現した写真作品として完成させることができたか。

### 9. 第4時の目標と展開

#### (1) 第4時の目標

- ① 各自の写真作品をグループ内でみて、気がついた点を伝え合う。
- ② クラス全体で各グループの作品を鑑賞する。
- ③ 学習ノートの記入と、批評を行うことにより自他のグループの作品意図を理解し、表現の良さや個性による違いを感じとる。

#### (2) 準備

〈教諭〉 生徒が撮影した写真を印刷したもの、学習ノート

〈生徒〉 筆記用具

(3) 第4時の展開

展開	時間	指導者の活動	生徒の活動	指導上の留意点
導入	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回の授業を振り返る</li> <li>・再度、題材のねらいを伝える</li> <li>・本時の流れを理解させる</li> <li>・各グループに、最終的に撮影した写真の印刷されたものを配付する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回までの内容を確認する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・題材を再度理解させる</li> </ul>
展開Ⅰ	10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループで、印刷された写真を見ながら言葉のイメージが表現されたか確認させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ内で、メンバーの写真を鑑賞する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ内で自由な意見交換が行われていることを確認する</li> <li>・写真を読み解くことを意識させる</li> <li>・様々な考え方があつたことを理解させる</li> </ul>
展開Ⅱ	10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス全体で、各グループの作品を鑑賞させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループの作品を鑑賞し、各作品の表現に触れる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色や形、工夫している点に目を向けさせる</li> <li>・気がついた点をメモさせる</li> </ul>
展開Ⅲ	20分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれの作品を観て感じたことを発表させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鑑賞において発見したこと、感じたことを他者と共有する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数名の生徒に発表させる</li> <li>・生徒の発言が、クラス全体で共有されるように、進める</li> </ul>
まとめ	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業のまとめをする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話を聞く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常的に面白い視点、豊かな世界を発見する喜びを伝える</li> </ul>

#### (4) 第4時の評価

- ① 自分たちで撮影した最終的な写真作品をグループ内でみて、気がついた点を伝え合えたか。
- ② 各グループの作品を鑑賞して、作品の特徴を捉えたり、表現の豊かさを感じとることができたか。
- ③ 作品を鑑賞して感じたことを、発表、または、それを聞きとり他の生徒と共有できたか。

本授業実践は、言葉（擬態語）から得られるイメージを捉え、そのイメージをデジタルカメラで撮影し表現の素材として使用する。使用する擬態語は、「ふわふわ」「ざらざら」「ぐちゃぐちゃ」「つるつる」の4種類とし、グループ内で同じ擬態語を撮影する。4種類の擬態語の選択理由としては、学校内での撮影を想定した授業であるため、学校にあるものから連想されることを条件とした。さらに、4種類の擬態語には全く異なる質感を用意し、作品に幅が生まれるように設定した。撮影し印刷された写真を切り貼りし、言葉のイメージへと再構築する。最後に、模様の描かれた透明フィルムを重ね、透明フィルムの模様を通して見える切り貼りした写真を再度撮影し写真作品とする。透明フィルムは、切り貼りした写真と一体となり、新たな質感を生み出す効果がある。

授業の目的としては、擬態語から発生するイメージについて、写真撮影を通してとらえることで質感の感受を行い、感覚の幅を広げていく。さらに、生活のなかで発見した質感が美術制作のなかで広がりを持って影響し合い、作品を構築することを認識させることを行う。対象の特徴をとらえ、想像力を働かせて発想させるために、質感に視点を置き素材の違いによる表現の多様性を理解させる。さらに、ごつごつした、などの擬態語を写真撮影を通して捉えることで、多くの質感を体感し、その感覚の幅を広げて行く。説明のための撮影ではなく（例えばリンゴを撮影することを目的とする）、形のない擬態語からイメージした質感を伴う対象を撮影することで、ものの「感じ」を含めた内容を撮影することが可能となる。さらに、様々な質感を知ること、美術作品への関心を持たせ、表現の幅を広げることにつながる。本授業では、質感の感受によって、質の伴った作品を制作するためにデジタルカメラを利用する。

グループ活動を行う理由として、グループに対し与えられる擬態語はひとつだが、この言葉から感じられる内容は個人個人異なることを認識することにある。4人がまったく同

じ感じを受けることはなく、その感覚は唯一無二の存在であることが言える。つまりは、ひとつの言葉から、4 つ以上の「ごつごつした感じ」が連想される。さらに、撮影する対象物をグループ全員が同じものとするため、撮影対象を決定するために感じたことの意見交換が必要となる。他者の考えを取り入れ、様々な思考を展開し撮影に至ることで、環境、人間による相互作用が生まれ、関係を築くことになる。つまり、イメージの共有が行われる。このことは、言葉の持つ伝えあう機能が、そこから発生する「感じ」を共通理解へと導いている。さらに、伝えることで自身のイメージをより具体的なものへとする。日常生活の中にある様々な質感を発見し創作へと結びつけることで、美術への興味、関心を日常的なものへとすることが想定される。

作品制作における段階的な流れを設定し、授業実践を行う。(表 13 参照)

表 13 作品制作のプロセス

<p>〈第 1 段階〉(日常的経験)</p> <p>日常生活から様々な事物を感受する。直接的に作品の構成を意識した内容でなくてよい。周囲の変化に対し感覚的に経験を積むこと、風の冷たさ、太陽の温かさ、木々のおい、バラのとげの痛み、街の喧騒など、五感で感じられる経験を蓄積する。</p>
<p>〈第 2 段階〉(意識的経験)</p> <p>4 人 1 グループとし、与えられた擬態語について話し合う。話し合い後、言葉のイメージを捉えるために、学校内にて五感を使い意識的に観察する。グループのメンバーとの意見交換により、環境、人間による相互作用が生まれる。個人では発見できなかった感覚に気がつく。イメージの確認と記録のためにデジタルカメラを使い撮影する。</p>
<p>〈第 3 段階〉(イメージの立ち上げ)</p> <p>撮影した写真を見て、感じていたことが画面に表現されているか確認する。切り取られた質感より新たな表現をイメージする。取捨選択された日々の出来事や関心から、作品の大まかな目的を設定する。無意識的に第一段階での経験が自身の感性の基礎となっている。さらに、第二段階での経験が作品としての色、形、質、思考を想起させ、イメージへの構成要素となる。</p>

〈第4段階〉(イメージの構築)

イメージをもとに撮影した写真を、さらに自分なりのごつごつのイメージに変化させるために、コラージュ技法にて形をつくる。媒介する素材に触れることで、日常的経験と感覚的経験とが混ざり合い、新たな感覚とイメージを獲得する。

〈第5段階〉(作品化による性質の変化)

質感の描かれた透明フィルムを上から重ね、再度写真撮影する。透明フィルムには様々な質感を感じさせる模様が印刷されており、重ねることでより質感が強調される効果を生む。作品化によって性質は変化する。





## C 授業実践の分析と考察

### (1) 言葉と体験との関係について考察

本研究における授業分析では、体験的な質感の感受と言葉とのつながりについて読み取れる場面とし、プロセスの第2段階を、本授業のビデオ記録より考察する。ビデオ記録より、発話、行為をもとに分析する。表14は、ビデオ記録より切り取った画像を表示している。

このグループに与えられた擬態語は、「つるつる」である。生徒A(写真23左から2番目の女子生徒)は感じたことを次々とその場で発言していた。写真22では、壁に触れながら歩き指先から伝わる感覚を「ざらざらしている。」と発言している。視覚を通して言葉のイメージを探す上で、自然と手でもものに触れ、触覚による感覚を言葉のイメージと照らし合わせていることが推測される。対比的に生徒B(写真22に写る男子生徒)は、感じた事をすぐに発言することは少ないが、グループのメンバーの発言に耳を傾け、その方向に目を向けていた。写真22の状況も2人の女子生徒が壁に触れ、続いて壁にかかるニスの塗られた木材の標識に触れ、壁との違いについて「これはつるつる」と発言したことに対し、生徒Bは、生徒Aが触れているものに視線を向け確認していた。視覚情報は、対象物の形と色でその質感を想起させるが、手で感じることで更なる情報を獲得可能にさせる。

表 14 言葉を体験的に捉えることの一場面（つるつる）

状況写真	発話	行為
 <p>写真 22</p>	<p>A:「ざらざらして る。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・壁を手で触れ ながら目的の場 所まで移動</li> </ul>
 <p>写真 23</p>	<p>D:「ここもつるつる してるよ。」 筆者:「なぜ、そう 感じた？」 D:「すべるから。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地面より足に 伝わる感覚を伝 え合う</li> <li>・足を滑らせる ようする</li> </ul>
 <p>写真 24</p>	<p>A:「ここもつるつる してるよ。」 D:「どこ?してませ ん。」 C「してないよ。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・金属の手すり に触れ, 地面を 視覚にて確認し ながら移動</li> </ul>
 <p>写真 25</p>	<p>C:「これでいいと思 う。」 A:「つるつる, つる つる。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きく手を動 かしながら窓に 触る</li> </ul>



 <p>写真 26</p>	<p>B:「すげえ, つるつるしてる。」 C:「石にしよう。」</p>	<p>・3cm 程度の石をみつけグループのメンバーに見せる・石を水に濡らす</p>
 <p>写真 27</p>	<p>D:「かげでできる？」 B:(返事なし)</p>	<p>・自分の手で影をつくなどの工夫をしながら撮影を試みる</p>

写真 23 では、靴底から伝わる質感を、足を滑らすようにし読み取っていた。「つるつるしている」と発言した生徒に、筆者が「なぜ、そのように感じたのか」と尋ねたところ「すべるから。」と答えた。このとき、生徒のなかで、言葉のイメージと身体から得られる感覚とがつながりを持ち、体験的に質感を捉えたと読み取ることができる。与えられた言葉に対し、そのイメージにあったものを撮影するために、視覚、触覚を利用し観察していた。写真 24 における一場面に関しても、移動する最中、常に体験的に質感を捉えることが行われており、その探究は言葉との照らし合わせが要因となっている。

デジタルカメラによる撮影は、グループで撮影対象を一つにすることを条件としているため、各自が勝手に撮影することはなく、常にグループ 4 人による感覚の情報交換が行われていた。一時、窓を撮影対象としたが、その後に生徒 B が 3 c m 程度の石をメンバーに見せ、「すげえ, つるつるしてるよ。」と伝え、確認させる。さらに生徒 B は、その石を水で濡らし、求める質感に近づける行為に至っている。つまり、生徒 B は、石がつるつるしていると感じ、そのことをメンバーに伝えたが、その間も常につるつるに対する照らし合わせが思考されていた。後に筆者が生徒 B に、石が水に濡れた状態を経験的に知っていたか問うと、知っていたと答えた。より言葉のイメージに近づけるために、経験的に水に濡

らすことへ至ったと言える。この行為は、より適切な質感を探求することで生まれた体験であり、質を伴った経験と捉えることができる。

## (2) 作品化によって得られる質感に関する考察

様々な質感を感受し捉えられた写真は、経験から発生した質が含まれた素材として成立している。写真そのものに手を加えることで、さらにその質を変容させて行く。言葉のイメージをより表現するために、切り貼りによって加工し(写真 29, 32) , さらに模様の入った透明フィルムを重ねて写真撮影することで、質の伴った写真作品(写真 30, 33)として完成させる。

### 生徒 A の作品経過

写真の切り貼りは、言葉のイメージがより表現される形を探し、行う。擬態語に表われる「感じ」を自身の価値観と照らし合わせ、捉え再構築する。透明フィルムに関しては、様々な模様の描かれたものを 40 種類用意し、各自のイメージと照らし合わせ適切なものを選択する。重ねたものを写真撮影することで、一体感を持って作品化される。

生徒 A は学習ノートに、デジタルカメラで撮影した写真 28 を見て感じたことについて「つるつるだけどへこんでいた。」と記述している。さらに、模様入り透明フィルムを重ね撮影した写真 30 についての同様の質問に対し「フィルターは影みたいに見えて、うしろの絵が、水の中に石を投げたらホワァーってなるやつみたい。」と記述している。つまり、「つるつる」を感受した経験と、自身の今までの経験とが出合い、美術的表現技法を媒介することで、さらなる質の変容が行われたと読み取れる。つまり、この経過において言葉が、美術的表現技法を介した表現へと生成されたことが確認できる。





写真 28 デジタルカメラで撮影された写真



写真 29 印刷された写真をコラージュ

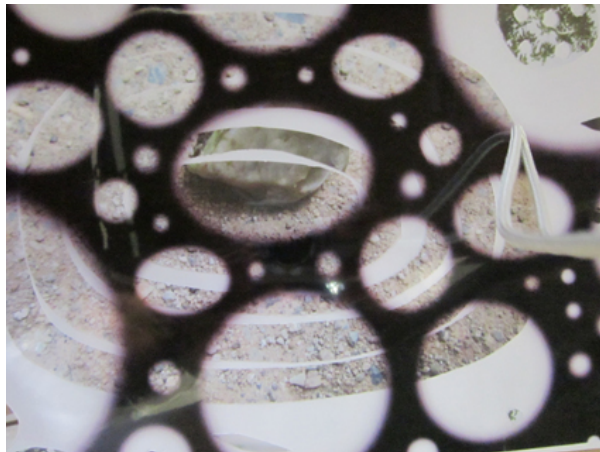


写真 30 模様入り透明フィルターを重ね撮影

図 23 生徒 A による写真



写真 31 デジタルカメラで撮影された写真



写真 32 印刷された写真をコラージュ



写真 33 模様入り透明フィルターを重ね撮影

図 24 生徒 B による写真

生徒 B に関しても生徒 A と同様の質問を写真 31 に対し行ったところ、「ごつごつしている石がまわりにあったからつるつるしているように見える。かげがあるものよりかげのないほうがつるつるしているように見える。」と記述している。水に濡れた石の質感を他の質感と比較し、その様子を写真のなかから再発見している。写真 33 に対しては「波がうまうまいて良かった。」と記述している。生徒 B にとって、つるつるという言葉から得た感覚は、質感の対比によってさらに明解になる。その写真のなかにある形、色、質感と自身の経験とを照らし合わせ、波と岩を想像し新たな表現として生成している。

表 13 における第 1 段階、第 2 段階で得た経験は、第 3 段階においてイメージ構築の一要素となり、第 5 段階において新たな性質に変化したと言える。脳科学の分野において、茂木は次のように述べている。

脳は物体を認識する際、色、形、テクスチャー、動きを同時に取り入れている。それぞれの視覚特徴は、様々な視覚野においてばらばらに表現されている。つまりは、ものの塊が認識されえる際、脳ではそれぞれの視覚特徴が統合され、一つのものを認識している。<sup>1)</sup>

としている。このことを広く捉えれば、第 1 段階、第 2 段階での経験の際にも、様々な視覚情報が、色、形、質、動きに分かれて脳に表現されている。このことが第 4 段階でのイメージ構築の際、それぞれの記憶の要素が組み合わせとなり、新たな形式を生み出す。経験についてデューイは次のように述べている。

経験は絶えまなくおこる。なぜなら、生き物と環境条件との相互作用は生きる過程そのものだから。そこに抵抗と葛藤の条件が加わる。すると、その相互作用に関与する自我と世界の外見と中身は感情と観念をともなうようになる。そして経験の性質が変わる。<sup>2)</sup>

生徒 A、生徒 B とともに性質の変化を読み取ることができた。ひとつの言葉をきっかけに質感の感受が行われ、その経験によって新たな性質を持って生徒の経験となっていることが読み取れる。擬態語から質感をイメージし、そのことがきっかけとなり実物から質感を

感受する。撮影、写真を利用したコラージュ的作品制作を通し、質的な経験を含んだ作品となっている。最終的に、波紋や波のイメージへと展開された記述が見られたが、その導入は質の感受であり、言葉のイメージを体験することにある。つまり、その経験を経て表出された波紋や波といった内容であり、それが作品となる。経験によって質は変化し、美術表現媒体を通して日常の事物から美術表現へと、凝縮した性質へと生成されたことが読み取れる。

作品を鑑賞する際には、この質感に対する経験が、作品の表面的内容だけではなく、個々人の持つ質感の認識が作品の内部に迫って行くことを可能にさせると言える。経験が作品を観ることを支え、鑑賞によってさらなる質の獲得へとつながる。

人間はひとりひとり異なる感覚を持っている。本授業で取り上げた流れのなかに言語化することが含まれているが、言語化することで、その対象物の質感を特定し無限に存在する質感を限定的にすることが行われる。つまりは、「感じ」の可能性を狭めているようにも捉えられるが、ここでの目的は、質を認識し、共有することが可能になることにある。学校という環境のなかで、他者に自分の感覚を伝えることは、言語や表現を通して行われ、人間形成の一部を担うものとなる。「ごつごつ」という感覚を共通認識によって捉え、その表現にいたることで、他者の作品を観た際にもその経験の数だけ、感覚的に捉えることが可能となる。さらにそのことを言語化する、もしくは、自分なりの表現へと変換し伝えることも可能となる。

#### D 授業実践から得られた成果

本授業実践は、中学校美術科の制作過程における生徒の「体験」に注目し、言葉と感覚的な経験との結びつきが作品に与える役割について明らかにすることであった。そのため、言語利用として擬態語を用い、言葉とイメージの結びつきについて、生徒の発話より分析を行った。このことから、次のような結果が得られた。

ここまで、言葉から発生するイメージと、そのイメージに合う質感を感受し探究することで、作品に質が発生する場面を考察してきた。言葉の与える広がり、現実のものと同様、質感をより実感しながらその感覚を獲得することに至っている。さらに、美術的手法を媒介することで、質が変容し作品へ生成されていた。始まりから終わりまで軸となった言葉は、表現するための指標となり、作品制作における一要素となっていたと捉える

ことができる。言葉が設けられていることで明確な目的のもと、感覚的に対象を捉え、思考し比較検討が行われていた。

美術教育において表現媒体との出会いは、価値の発見、感覚的な経験などが上げられる。本実践では、デジタルカメラを媒介することで得られる視点が、体験をより具体的なものとし成立させていた。表現媒体としてデジタルカメラの普及が進むなか、教育的な視点において写真を利用することの明確な指標が求められる。この授業実践を通し、言語はその繋ぎ目となり、体感したことをより明確に示し、共通認識をもって他者との関係を築くことを可能すると言える。

写真を切り貼りする行為は、写真撮影のみでは発生しなかった新たな質感を感受していた。擬態語を基に、別な媒体を用いて創造し新たな形を見出すことは、制作者の内的世界にさらに入り込んだ表現が可能となる。写真撮影時に捉えた擬態語による質感は、形を再構成することで、新たな質を得ることになる。

美術表現は、日常生活で得る質感に、特定の活動＜体験＞が伴うことで、質感が変化する。それは、言葉＜擬態語＞の意味のつくり替えとなる。美的体験は、言葉を新たな様相へと変化させ、実体としての作品と、それを感じる心といった、目には見えない価値を生むと言える。美術作品は、目に見えない感じる心と、作品としての物体によって、均衡を保っているのであり、そのことを段階的に経験することは、言葉とを感じる心とのつながりを知る経験になると考えられる。これは、つまり深層意識への働き掛けであり、認識となると言える。

では、続いてこの実践の流れを別な主題、または表現手法に置き換えた場合、どのような力を発揮するのか。更なる実践を重ねる。

## 第2節 デジタルカメラによる作品制作において擬態語を用いた中学校美術科 授業実践2

### A 授業実践の目的と概要

本授業実践は、中学校美術科教育における言語活動について、授業実践を通して美術表現における言語の役割を分析し、美術経験と言語との関連性を明らかにすることによって、

美術科における言語活動のビジョンを提示することである。

授業の概要は、次のようになる。

- 題材名：「学校って何色？」
- 実施年：平成 24 年 2 月
- 対象：埼玉県三郷市立 H 中学校第 1 学年
- 人数：男子女子合計 25 名
- 指導時間：全 3 時間
- 実施場所：三郷市立 H 中学校校内
- 使用媒体：デジタルカメラ
- 授業者：西園政史

## B 授業実践の計画と展開

### 学習指導案 中学校第 1 学年(3 時間扱い)

日時 平成 24 年 2 月 16 日（木曜日）第 6 校時

2 月 23 日（木曜日）第 2 校時

3 月 1 日（木曜日）第 2 校時

場所 三郷市立 H 中学校

学年 1 年（男子女子合計 25 名）

#### 1. 題材名「学校って何色？」

#### 2. 題材設定の理由

中学校第 1 学年という時期は、小学校課程において図画工作として行ってきた授業が美術となり、学びの意識に変化が表れる。例えば、図画工作では、思い通りにつくれていた絵画表現が、中学校美術となり「上手に描けない」等の悩みにより、美術そのものを嫌うことが伺える。そこには、「きれいに描けなければならない」や「そっくりに描けること」といった技術的側面に対する理想とのずれがある。中学校第 1 学年という時期に、その偏った思い込みで、「美術が苦手」という意識付けがされてしまうことは避けなければなら

い。描く力をつけながらも、感じることの豊かさを体感し、それを得るための行程を明確に理解し、色や形、またはつくることによって得られる表現の広がりを実感することが必要となる。つまり、自らの持つ感性を通し感じられる豊かな世界を、美術を介し発展させて行くことが求められる。

そこで、本題材では、「色」についての固定観念を取り払い、色を感じることを行う。色と言われると、「赤」や「黒」といったように色の名前を思い浮かべるだろう。しかし、色とはそのことを表すことに限られたものではない。楽しい感じの色、弾むような色の感じ、冷たい色、といったように色の持つ「感じ」によってとらえることもできる。本題材では、「学校」をテーマに、その色の持つ質感をデジタルカメラを利用して表現することをを行う。

#### 【教材観】

美術の「感じる豊かさ」を知るために、自由な発想を意識する。思い込みは捨て、日常生活とは異なる視点を持って、課題を認識する。見ることから感じることを行い、表現へと結びつける。

#### 【生徒観】

他者との関わりによって、価値観の違いを認識し、そこに表現の広がりを実感する。このことによって、様々な感じ取り方があることを知り、美術表現の豊かさを得ると同時に、創作の枠を広げることを意識する。生徒一人一人が、豊かな感性を持っていることを認識し、多岐にわたる美術表現を体験するなかで、表現の豊かさを体感する。

#### 【指導観】

今回の授業では、色という認識を質感と一緒に捉えることで、新たな価値観を獲得する。そこでは、日常生活では発見できなかった視点を美術の授業で獲得し、新たな感覚を意識させる。日常生活で見慣れた風景も、意図を持って見ることで表現として認識できることを伝える。

### 3. 指導目標

- 鑑賞、批評し合うことで表現の違いを知り、互いの意欲を高め合う。【関心・意欲・態度】
- 色に対し、日常とは異なる視点を持ち、新たな感覚とともに作品をつくり上げる。【発想・構想】
- デジタルカメラを利用し質感と色を感受し、作品化する。また、独創性のみを重要視するのではなく、他の児童に伝えることも意識する。【技能・表現】

○美術作品をつくるという視点においてデジタルカメラの利用方法を理解する。日常の場にある様々なものを美術表現として捉えることができる。【知識・理解】

#### 4. 指導計画（全3時間）

第1時 カメラの使い方，擬態語の説明をし学校内での撮影を行う。

第2時 撮影した写真から質感を確認し，撮影した写真1枚1枚を6分割にし，その中から縦3枚，横3枚，計9枚になるように1つの画面に再構成する。構成されたものは，デジタルカメラを使用し再度撮影し作品化する。

第3時 完成した作品を鑑賞する。初めに，自身が制作した作品を観て感じたことを記入させる。続いて，抽象画を見せ感じたことを記入させる。

#### 5. 第1時の目標と展開

##### (1) 本時の目標

- ①カメラを自分の意図したように利用し，撮影する。
- ②グループで色について共有しながら写真を撮影する。
- ③目に映る情報だけではなく，触覚，音，動きなどから質感と色の探究を行う。

##### (2) 準備

〈教諭〉 グループで一台のカメラ，学習ノート，擬態語の書かれたカード

〈生徒〉 筆記用具

##### (3) 第1時の展開

展 開	時 間	指導者の活動	生徒の活動	指導上の留意点
導 入	5 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ（自己紹介）</li> <li>・学習ノートを配付する</li> <li>「突然ですが，皆さん，学校って何色だと思いますか？」</li> <li>・学習ノートに記述させる</li> <li>・数人に答えさせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・席につき説明を聞く</li> <li>・学校の色を思考する</li> <li>・学習ノートに記述する</li> <li>・擬態語について確認す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員が席に着くことを確認する</li> <li>・まずは，個々に思考したことを記述するよう促す</li> </ul>



		<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の内容を説明する</li> <li>「前回の授業で習った擬態語を使って、学校の感じを色で表しましょう。」</li> </ul>	る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明時に、イメージが固定化されないよう注意する</li> </ul>
展 開 I	15分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループに、擬態語の書かれたカードを配付する</li> <li>・擬態語を記入させる</li> <li>・個人で、擬態語を見て感じたことを記入させる</li> <li>・5分間、グループ内でその言葉から受けるイメージについて意見交換させ、記入させる</li> <li>・以下の注意点を伝える</li> <li>○グループで擬態語からイメージしたものをもとに、学校内で撮影するものを探し、撮影を行う</li> <li>○触れる、音を聞く、動かすなどし、視覚以外で感じることも意識すること</li> <li>○撮影枚数は一人3枚とする</li> <li>・カメラをグループに1台貸し出すと同時にカメラ番号を学習ノートに記入させる</li> <li>・カメラの使い方を説明する</li> <li>「では、まず電源を入れてみましょう。次にモニター画面を見ながらシャッターボタンを押してみましょう。」</li> <li>・走らない、カメラは水につけな</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉カード、学習ノートを受け取る</li> <li>・配付された擬態語と名前を学習ノートに記入する</li> <li>・個人で、言葉を見て感じたことを記入する</li> <li>・5分間、グループ（4人1グループ）内で、用意された言葉のイメージについて意見交換し、色々なイメージを共有する</li> <li>・注意点を聞く</li> <li>・グループで1台のカメラを受け取る</li> <li>・カメラ番号を記入する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由な発想で、言葉から受ける印象を伝えあえているか確認する</li> <li>・話し合いが止まってしまっているグループに対しては、例えとして身近にある物に触れたときの感覚を言葉にさせる</li> <li>・言葉は、「つるつる、ざらざら、がさがさ、ぐちゃぐちゃ」とする</li> <li>・カメラの取扱について、しっかりと理解させる（撮影、プレビュー）</li> </ul>

		い、落とさない、やさしく扱うなどの注意する点を伝える ・教室に集合する時間を伝える	・カメラの使い方を聞く ・時計を見て時間を確認する	
展開Ⅱ	20分	・学校内（校庭，校舎内）で写真撮影をさせる（雨の場合は校舎内のみとする）	・学校内で，言葉からイメージされるものを撮影する ・色々なところに目をやり，視線の角度を変えるなどし幅広く探す ・視覚だけではなく，触覚，聴覚，嗅覚も使い，質感を感受する ・指定の時間に教室に戻る	・校舎，校庭で撮影させる ・雨の場合は校舎内のみとする ・視点を上下させたりし，観察させる ・触れる，音を聞く，動かすなどし，視覚以外の感覚を使い質感を感じるように伝える ・時間内に教室にもどるよう促す
まとめ	10分	・デジタルカメラで，撮影してきた写真を確認させる ・カメラ，学習ノートを回収する ・次の授業内容を伝える	・撮影してきたものを確認する ・カメラ，学習ノートを提出する ・次の授業説明を聞く	・戻ったグループごとに撮影出来ているか確認する ・カメラ，学習ノートを回収し，確認する

#### (4) 第1時の評価

- ①カメラを自分の意図したように利用し撮影できたか。
- ②グループで色について共有しながら写真を撮影できたか。
- ③目に映る情報だけではなく触覚，音，動きなどから質感と色の探究できたか。

### 10. 第2時の目標と展開

#### (1) 第2時の目標

- ① 印刷された自分の撮影した写真を3枚確認し、写真から質感を読み取る。
- ② 撮影した写真1枚1枚を6分割にし、その中から縦3枚横3枚、計9枚になるように1つの画面に再構成する。
- ③ 構成されたものは、デジタルカメラで再度撮影し作品化する。

(2) 準備

〈教諭〉 生徒が撮影した写真を印刷したもの、学習ノート

〈生徒〉 筆記用具

(3) 第2時の展開

展開	時間	指導者の活動	生徒の活動	指導上の留意点
導入	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回の授業を振り返らせる</li> <li>・再度、題材のねらいを伝える</li> <li>・本時の流れを理解させる</li> <li>・各グループに、自分たちで撮影した写真の印刷されたものを配付する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回までの内容を確認する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・題材を再度理解させる</li> </ul>
展開 I	30分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・撮影した写真1枚1枚を6分割にし、その中から縦3枚横3枚、計9枚になるように1つの画面に再構成させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ内で、メンバーの写真を鑑賞する。</li> <li>・分割した写真を用いて、色を意識し天地左右の配置を自由に構成し貼る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ内で自由な意見交換が行われていることを確認する</li> <li>・写真を読み解くことを意識させる</li> <li>・分割した写真は、色を意識し天地左右の配置を自由に構成させる</li> </ul>

展 開 Ⅱ	10 分	・3枚の写真を台紙に貼り，デジタルカメラで再度撮影し作品化させる	・切り貼りした写真を再度デジタルカメラで撮影し作品化する	・色や形について視点を持たせる ・気がついた点を自由に書かせる
ま と め	5 分	・授業のまとめをする	・話を聞く	・日常的に面白い視点，豊かな世界を発見する喜びを伝える

#### (4) 第2時の評価

- ①印刷された自分の撮影した写真を3枚確認し，写真から質感を読み取れたか。
- ②撮影した写真1枚1枚を6分割にし，その中から縦3枚横3枚，計9枚になるように1つの画面に再構成できたか。
- ③構成されたものは，デジタルカメラで再度撮影し作品化できたか。

#### 1.1. 第3時の目標と展開

##### (1) 第3時の目標

- ① 各自の写真作品をグループ内でみて，気がついた点を伝え合う。
- ② クラス全体で各グループの作品を鑑賞する。
- ③ 学習ノートの記入と，批評を行うことにより自他のグループの作品の作品意図を理解し，表現の良さや個性による違いを感じとる。

##### (2) 準備

〈教諭〉 生徒が撮影した写真を印刷したもの，学習ノート

〈生徒〉 筆記用具

(3) 第3時の展開

展開	時間	指導者の活動	生徒の活動	指導上の留意点
導入	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回の授業を振り返る</li> <li>・再度、題材のねらいを伝える</li> <li>・本時の流れを理解させる</li> <li>・各グループに、最終的に撮影した写真の印刷されたものを配付する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回までの内容を確認する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・題材を再度理解させる</li> </ul>
展開 I	10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループで、印刷された写真を見ながら言葉のイメージが表現されたか確認させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ内で、メンバーの写真を鑑賞する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ内で自由な意見交換が行われていることを確認する</li> <li>・写真を読み解くことを意識させる</li> <li>・様々な考え方があることを理解させる</li> </ul>
展開 II	10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス全体で、各グループの作品を鑑賞させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループの作品を鑑賞し、各作品の表現に触れる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色や形、工夫している点に目を向けさせる</li> <li>・気がついた点をメモさせる</li> </ul>
展開 III	20分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれの作品を観て感じたことを発表させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鑑賞において発見したこと、感じたことを他者と共有する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数名の生徒に発表させる</li> <li>・生徒の発言が、クラス全体で共有されるように、進める</li> </ul>
まとめ	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業のまとめをする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話を聞く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常的に面白い視点、豊かな世界を発見する喜びを伝える</li> </ul>

(3) 第3時の評価

- ① 自分たちで撮影した最終的な写真作品をグループ内でみて、気がついた点を伝え合えたか。
- ② 各グループの作品を鑑賞して、作品の特徴を捉えたり表現の豊かさを感じと

ることができたか。

- ③ 作品を鑑賞して感じたことを、発表、または、それを聞きとり他の生徒と共有できたか。

## C 授業実践の分析と考察

### (1) 授業内容の詳細

授業内容の詳細は次のようになる。

題材名は「学校って何色？」とし、表現媒体は、デジタルカメラを使用する。作品制作にあたり、擬態語を基準に撮影対象の観察を行う。条件として、4人一組のグループとし、各グループに一台のカメラ、一つの擬態語が設定される。擬態語は「ガサガサ」「ツルツル」「グチャグチャ」「ザラザラ」を使用した。これらの擬態語を使用した理由は、学校生活内で見渡せば感じる事が可能な言葉であり、身の回りにある様々なものから質感にたどり着くように擬態語を設定した。

授業計画は次の通りである。

#### 第1時<1日目>

- ①学校の色について、学習ノートに記入させる。(個人)
- ②設定された擬態語を各グループに提示する。(グループ)
- ③設定された擬態語について、感じたことを記入させる。(個人)
- ④グループ内で、設定された擬態語から想像される撮影対象について、意見交換を行う。(グループ)
- ⑤意見交換から撮影場所の候補を決める。(グループ)
- ⑥校庭を含む学校内を対象に、デジタルカメラを利用して撮影を行う。

#### 第2時<2日目>

- ⑦L判に印刷された自身の写真を確認し、設定された擬態語と写真とのつながりを確認する。

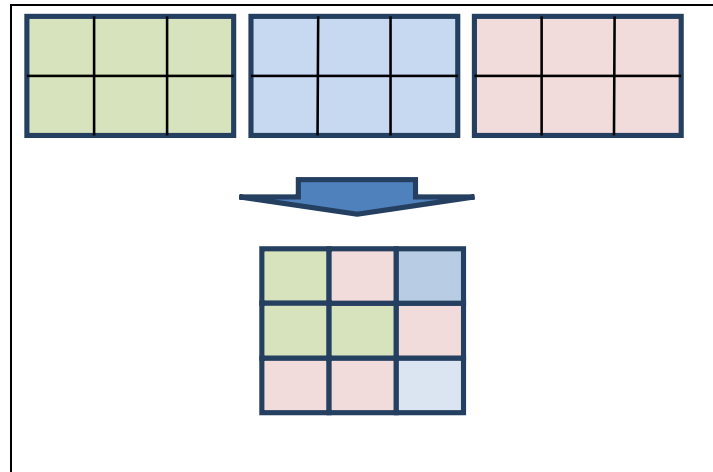


図 25 コラージュ的技法による再構成

⑧図 25 の示すように、撮影した写真 1 枚 1 枚を 6 分割にする。撮影した写真全てを分割し、その中から縦 3 枚、横 3 枚、計 9 枚になるように 1 つの画面に再構成する。その際、設定された擬態語がより表れるように、切ったものの中から並べ替えを行う。

⑨再構成したものを、再度撮影し写真作品として仕上げる。

第 3 時<3 日目>

⑩最終的に印刷された写真作品を見て感じたことを、学習ノートに記述する。

## (2) 言語活動に注目した行為と発話

言語活動を読み取るために、一つのグループに視点を絞り、ビデオ記録を行った。ビデオからは、各々が今居る環境から周囲を確認し、そこから発見できる質感、また過去の経験を想起し得られる質感をもとに、グループのメンバー同士が質感を共有する場面が確認できる。そこで、ビデオ記録より、擬態語から得られる質感の微細な差異について、やり取りが行われた場면을抜き出し、考察する。

表 15 生徒間における質感の共有

生徒	行為	発話
生徒 G	グループに対して発言	「ガサガサってむずかしくない？」
生徒 F	生徒 G に対して発言	「あるじゃねーか。ピッチャーマウンド ガサガサじゃねーか。」
生徒 G	生徒 F に対して発言	「え， そとやだ。」
生徒 F	生徒 G に対して発言	「いってみる？」
	間が開く	
生徒 F	生徒 G に対して発言	「バスケットボールはブツブツ。」
生徒 G	生徒 F に対して発言	「なんで， ブツブツなんだよ。」
生徒 G	相手を特定せず， 発言	「そとやなんだけどー。」
生徒 E	相手を特定せず， 発言	「すなはザラザラか。」
生徒 F	歌いだす	「ガサーザー・・・。」
	間が開く	
生徒 F	頬に触れながら	「あーはだがガザガザなんじゃない。」
生徒 F	逆の手に変え頬に触れながら	「ちょうどガサガサだ。」
生徒 G	相手を特定せず発言	「かべでいいや。」
生徒 F	生徒 G に対して発言	「かべはツルツルしてる。」
生徒 E	グループ全体に対して発言	「かべはねー。 ちょっとガサガサさがすのむずかしいよ。」



生徒 G	窓を指さしながら	「あのまど。」
生徒 E		「あれは、ザラザラだね。」
生徒 F	生徒 G に対して	「ピッチャーマウンド、ホームベース、ガサガサだから。」
生徒 G	うなずきながら発言	「ふーん。」

ここでは、生徒 F が学校生活を振り返り、撮影対象に気がついた点に着目する。生徒 F は、ガサガサという擬態語から、日々練習を行っている野球のグラウンドを連想し、そこにある野球のベースをグループメンバーに提案した。それに対し、生徒 G が、撮影場所が外であることに対し否定的な発言をする。その日の天候や状況、そして生徒の身体的な問題を含め、言葉＜擬態語＞のイメージを判断していることが読み取れる。続いて、その他の撮影対象としてバスケットボールを上げ、その発言がきっかけとなり、指定された擬態語から想像される撮影対象について具体的な意見交換がグループ全体で行われる。他のメンバーから、砂や肌、壁、窓についての発言があり、一つの擬態語から微妙な質感の差を話し合い、判断している。

### (3) 写真撮影時に発生した発話と行為

続いて、グループでの撮影時に発生した言語活動に着目する。

グループは生徒 F の意見によって、まずは野球のベースがある場所に向かう。そこで、表 16 において生徒 F の個人的な考えとグループとしての考えとのずれから、目的の再確認と修正を行う場面を抽出し示す。

この場面では始めに、生徒 F (写真 35, 一番左) がイメージする野球のベースが置かれた場所へ移動する。なぜこの場所なのかという筆者の質問に対し、生徒 F は、「野球が大好きだからです。俺がいずれピッチャー・・・野球選手になるから」と自身の学校生活と将来の夢を語り、撮影の理由とした。

生徒 F は、撮影時にベースの上ののった砂を足で払い、足から伝わる感覚による質感の感受、そこから発生する音も同時に聴覚で感受し確認したと言える。ここで大切なのは、言葉によるきっかけが設定されていることで、撮影行為を行う際に感じとる姿勢が生まれ、

対象とのやりとりがより濃密に行われることである。これは、言葉を介すことで、質感の意識が発生し、対象をより具体的に捉えることが成立していると言える。

生徒 F にとって、学校生活全体を見渡し、自分にとってのガサガサを思考したとき、教室での意見交換の際（表 15）に、「（生徒 G に対して）ピッチャーマウンド ホームベース ガサガサだから。」と発言している。つまり、擬態語〈ガサガサ〉をもとに学校生活を振り返ったとき、そこには部活動での場面が最も強く思い起こされたと推測できる。学校という漠然としたイメージから、擬態語〈言葉〉が深層意識に触れ表現につながったと言える。

しかし、生徒 E（写真 35、左から 2 番目）によって、撮影場所に対する別な意見がグループ全員に伝えられる。生徒 E は、草むらや枯れ葉の方がガサガサを感じ取れると予想し、「踏んだり触ったりしないとガサガサしないよ。踏んだり押したりしないとガサッとならないから。」とグループのメンバーに伝え感覚の共有を試みる。生徒 E は、周囲を確認し現在の位置から 10m 程度の位置に枯れ葉のある場所を視覚的に捉え、確認していた。

つまり、生徒 F の行動に対し生徒 E は、別な考えがあることを伝え、質感に対する微妙な差異を、言語を介して共有したことになる。教室での話し合いでは発生しなかった内容を、撮影現場において感じ取り、撮影に反映させることを試みたと言える。このことは、作品制作における質（クオリティ）の向上につながる要素だと言える。意見交換や質感の共有によって、質感の差異を感じ取り、このことで経験はより研ぎ澄まされたものとなる。グループで活動することによって、言語のやり取りが生まれ、差異化によってより適切なものへの探求が生まれる。

表 16 深層意識と質感との関わり

発話	行為
	
<p>写真 34</p>	
<p>筆者：「何でここにしようと思ったの？」</p> <p>生徒 E：「F くんです。」</p> <p>生徒 F：「野球が大好きだからです。俺がいずれピッチャー・・・野球選手になるから。」</p>	<p>・足で野球ベースの上の った土を払いながら、靴底 から感受している 音：ズザズザ</p>
	
<p>写真 35</p>	
<p>生徒 E：「このあと、草むらに行こうぜ。」</p> <p>生徒 E：「踏んだり触ったりしないとガサガサしないよ。踏んだり押したりしないとガサッとならないから。」</p>	<p>・生徒 F の行為に対し生徒 E は、テーマである「ガサガサ」を共有しようとグループのメンバーに問いかける</p>



写真 36

生徒 F：「E 君，影じゃま。」

・撮影対象に人の影ができることに対し，メンバーに指摘し，影ができない状況を作り出す



写真 37

筆者：「ガサガサをもう一回話し合っさ。」

・グループのメンバーが足踏みするように，枯れ葉の中を踏んで歩く

生徒 E：「ガサガサは草むらのなかです。」

周囲に伝達を行った後に，グループは，生徒 E が発言したことを共有するように，枯れ葉や草の生えている場所を踏み，ガサガサを感じ取ることをおこなっていた。生徒 E にとって，言葉と質感との感受がつながりを持って周囲と共有が行われた瞬間に，その質感は確実なものになる，と言える。作品制作における対象の感受は，日常生活とつながることにより強固なものとなって，作品に反映されることが予想される。

生徒 E は，生徒 F が野球のベースを撮影している際に，その横で「踏んだり触ったりし

ないとガサガサしないよ。踏んだり押ししたりしないとガサッとならないから。」と伝えている。これは、草などを踏むことで得られる感触が、目的の質感に近いことを経験的に知っていたことによる発言だと捉える事ができる。言語活動の視点から捉えれば、生徒Eは、過去の経験を言語化し、周囲に伝えている。つまり、言語化したことで、これまでの経験が次に起こる経験を支え、より明確に周囲との質感の共有を可能にしている。

この課題は、完成作品（写真41・44）を見ると解るように、2枚から3枚の写真を再構成し1枚の写真作品として完成させている。複数枚の写真を切り、小片を組み合わせることで抽象的な図像となり、撮影対象の色を抽出した作品として成立する。擬態語を通して、学校の色を思考し作品化に至ったことで、生徒Fの作品（写真41）は、野球のベースと校庭から伝わる質感が画面に反映され、砂と野球ベースの色彩で構成された作品となる。

生徒Eの作品（写真44）は、枯れ葉や植物から伝わる色彩が画面を構成している。生徒Eにとって、学校のイメージをガサガサという質感を通して捉えたとき、枯れ葉や植物を踏む感触につながりを抱いた。そして、撮影行為を経て構成された作品からは、植物に触れたときに得られた感触と、植物の色彩を同時に読み取ることができる。

両者の作品制作過程から読み取れるように、つくる者の深層経験と質感を伴う経験が、写真を構成しおり、再構築することで色彩と質感を抽出した作品として成立している。

生徒Fによる写真素材



写真 38



写真 39



写真 40

生徒 F による完成作品



写真 41

図 26 <生徒 F>写真素材と完成作品

生徒 E による写真素材



写真 42



写真 43

生徒 E による完成作品



写真 44

図 27 <生徒 E> 写真素材と完成作品

#### (4) 課題後の学習ノートによる記述内容

本授業実践では、「学校って何色？」という質問から始まった。そして生徒は、自分にとっての学校を想像しながら、擬態語を介して撮影対象の決定に至った。そこには、デジタルカメラを通して撮影対象と出会うまでに、グループのメンバーとの意見交換、自身の記憶、移動中に眼に入るものなどから総合的に対象を選択している。このことは、ビデオ記録による発話と行為の分析によって明らかとなった。

生徒にとって、美術科の授業であっても、自分を反映することで、自分にしかない表現に至ることが可能となっている。そして、周囲の生徒との意見交換による摩擦は、美的経験としてより研ぎ澄まされた取舍選択の発生につながっていた。つまり、言語を介することで共通認識が生まれ、伝えるために、そして受け取るために、感じていることを言葉にして共有を試みる。このような経験を得た生徒にとって、作品制作を通じて新たな価値観が生まれたことが、制作後の学習ノートによる記述から確認できた。

制作後の質問は、「自分の作品を観て感じたことを書きなさい。」となる。この質問の意図としては、まず「学校の色」というテーマで構成した作品から感じることを言語化させ、それが自分にとっての学校の色であることを認識させる。作品から感じられることが、「学校の色」を表す記号であり、作品がそれを象徴しているという解釈と、そこに広がる自分なりの言語が、美術作品制作を通して得られた経験と結びつくことを求めている。

生徒Eは、制作後「短い葉や長い葉や大きい葉がある。全体的に明るいけど静けさがある。」と記述している。この記述からは、美術作品制作を通じて、学校に存在する多様な「感じ」を感覚によって受けとめ、質的な経験が言葉に表れたことを確認できる。

生徒Fの記述では、「Xに見える。」と書いている。作品を見るとわかるように、野球のベースを再構成した作品には、「X」に見える形が読み取れる。作品から感じられることを記入するため、このような記述があってもおかしくはない。これを学校の色という解釈で捉えると、生徒Fにとって部活動で行う野球が、学校を表す上で最も重要な役割を果たしている。野球のベースはその象徴的な色であり、生徒Fにとっての学校の色を表現するに至っている。「X」というのは、そこから生まれた新たな価値観であり、作品を強くするための一要素と認識することができる。

デューイは、事物の知覚には、事物との相互作用の積み重ねが必要であることを次のように言っている。「人間の身体にとって最も重要な器官である目は対象を見る。すると、対象から働きをうける。つまり、対象からのお返しをうける。そして、このお返しはまた次



の新しい目の活動を誘いだす。そのとき、この活動には以前よりも増加した意味と価値が新しく付加されている。そして、目はこの活動を次々に進めることによって、美的な対象を不断に構築していくのである。」<sup>3)</sup>

つまり、対象と関係を築くことは、そこに関連する新たな視点が内在しており、美術作品制作を通した新たな意味と価値の獲得が不断に行われていると読み取ることができる。生徒にとっては、擬態語が起点となり深層意識に触れ、多様な視点、価値観を獲得し作品や思考に反映されていると言える。

#### (5) 美術科教育に内在する言語活動の役割

本実践では、中学校美術科の言語活動について、言葉と写真を利用した授業実践を通し、分析を行った。本授業実践における言語活動の特徴は、経験を通して得られる感覚が、言語との結びつきによって、より具体的に認識された点にある。そこでは、経験によって得られた感覚が具体化されたことで制作者の深層に迫り、周囲との意見交換によってより個が意識された内容へと変化していた。

言語は、生徒の持つ漠然としたイメージを、実感を伴う経験へ導き、個人の体験との照らし合わせを発生させていた。撮影前のグループでの話し合いの際に、メンバー同士で様々な質感の伝え合いが行われていた。各々が抱く事物に対する質感の捉え方は、個人個人が体験した記憶をもとに発言している。過去の経験から、設定された言葉を想起する。その際、メンバー同士がまったく同じ感覚を持つことは不可能である以上、それぞれが抱く記憶との差異が、より適切な対象へと導くことになる。その際、重要なこととして、一つの目的を設定することが上げられる。本授業実践では、言葉<擬態語>が終始一貫して制作の軸となっている。このことは、自由な表現の中で、目的を明確にし自身の体験との照らし合わせを意識的に行うことで、新たな価値を構築していく作業となる。自身の意識内で起こる差異は、取捨選択を行い質となって現れる。

滝沢武久は「どんなに豊かな経験でも、感覚の中にばらばらに登録されるだけなら、この経験を明確に把握することはできないだろう」とし、さらに「ものごとを認識するためには、経験内容に知的操作が加えられなければならない」<sup>4)</sup> と言っている。つまり、中学生においては、デジタルカメラを用いて、ただ撮影するだけでは、意図的な表現を獲得することは、困難である。個々の深層意識に迫り撮影行為に至るためには、知的操作としての言語利用が、その問題を解消すると考えられる。

撮影された写真と、その写真を撮影した際の経験とは、言葉によって結ばれている。写真に自身の持つ感覚が反映されたことで、明確にその感覚を獲得することとなり、認識へとつながる。

美術科教育における言語活動は、経験をより豊かにし、幅を広げる役割を担っている。それは、抽象的な要素や感覚的な内容を、イメージし捉えることにある。捉えるとは、つまり言語化である。形のないものをつくり上げる行為のなかには、常に言語とのやり取りと同時に具現化する能力が求められる。このことは、丸山の言う「絶えずゆれ動く差異」<sup>5)</sup>が、過去の経験と今起こっていることを結び、新たな価値と表現を見出すことにつながっているとと言える。

滝沢は、「事物と事物との間の類似性を何度も経験するとき、それについて概念が作られる。(中略)思考とは、こうして形成された概念を組み合わせながら、問題を解決するはたらきなことから、思考力を豊かにするためには、何よりも多くの経験を通して正確な概念を形成することが大切である」<sup>6)</sup>と語っている。美術は、人間のあらゆる活動に含まれる経験であり、美術を介して得られる多くの経験は、人間の持つ原始的な感覚である質感と、言語を介する思考とが、強いつながりを生み概念化されたものだと考えている。

以上から、美術科教育に内在する言語活動の役割を整理すると次のようになる。本実践では、美術科教育としての言語活動について、擬態語を介在させた。

- ① 擬態語を介在させた美術表現は、我々の深層意識にアプローチし、これまでの体験と照らし合わせることで、不明瞭な事物を美術作品として生成させることを可能にする。
- ② 言語活動の一つとして利用した擬態語は、対象を捉える際に、対象から得る感覚の言葉への置き換えを可能にし、具体性を持って認識することを可能にする。
- ③ 擬態語を介在させることで、グループで活動を行う際に、質感に対する微細な意見交換が行われる。擬態語という言葉が言葉として簡潔であることにより、他者との共有を容易にし、会話を発生させる。
- ④ 擬態語を介在させることで、生徒は、作品制作において終始一貫して擬態語との照らし合わせをして追求を行う。すべての美術表現の工程において言語が一貫性を持ち存在することで、生徒にとって表現の目的が明確化される。

## D 授業実践から得られた成果

本実践の目的は、中学校美術科教育における言語活動について、授業実践を通して美術表現における言語の役割を分析し、美術における経験と言語との関係性を明らかにすることによって、美術科における言語活動のビジョンを提示することであった。美術科教育における言語活動の役割は、次の4点に整理される。

- ① 言語活動としての擬態語は、我々の深層意識にアプローチし不明瞭な事物を美術作品として生成させることを可能にする。
- ② 擬態語は、対象から得る感覚の言葉への置き換えを可能にし、具体性を持って認識することを可能にする。
- ③ 擬態語は、グループ活動において、他者との共有を容易にし、会話を発生させる。
- ④ 美術表現の工程において言語が一貫性を持ち存在することで、生徒にとって表現の目的が明確化される。

現在学校教育全体に求められている言語活動について、以上の美術表現における言語の役割の視点から、中学校美術科教育における言語活動のビジョンを提示すると次のようになる。

美術科教育は、制作された作品の表層部分のみを問うものではなく、制作を通じて得られる経験とそれによって表現した作品とのつながりに、学びの意味があると言える。言語を介在させた美術制作は、他者との会話を築き、そこから生まれる感受の差異を経験させ、そして、深層意識に触れながら、表現を生成し作品をつくるという活動を可能にする。こうした作品を外的世界に生成することによって、深層意識に触れながら内的経験を生成することが美術科教育による人間形成となり、美術や世界の見方に変化を与えられられる。

本実践では、その一例として擬態語を美術表現に介在させ、以上のことを実証した。これまで、鑑賞教育や美術表現を支えるための言語利用は、いくつかの研究によって論じられている。本実践で導いた擬態語を介在させた美術表現の方法は、人間の持つ力や原始的な感覚に触れることを可能なものとし、美術科教育における言語活動の新たなビジョンになると期待できる。

### 第3章のまとめ

第3章では、中学校における授業実践とその分析を行った。第1節では、デジタルカメラによる作品制作において擬音語を用いた中学校美術科授業実践の1つ目として、中学校美術科の制作過程における生徒の「体験」に注目し、言葉と感覚的な経験との結びつきが作品に与える役割について明らかにした。言語利用として擬態語を用い、言葉とイメージの結びつきについて分析を行った。分析方法は、ビデオ記録による会話と行為の分析と学習ノートである。分析の結果、言葉の与える広がり、現実のものと合わせ、質感をより実感しながらその感覚を獲得することに至っていた。さらに、美術的手法（デジタルカメラ、コラージュ技法）を媒介することで、質が変容し作品へ生成されていた。始まりから終わりまで軸となった言葉〈擬態語〉は、表現するための指標となり作品制作における一要素となり明確な目的を築き、感覚的に対象を捉え思考し、比較検討が行われたことが示された。

第2節では、デジタルカメラによる作品制作において擬音語を用いた中学校美術科授業実践の2つ目として、中学校美術科教育における言語活動について、授業実践を通して美術表現における言語の役割を分析し、美術経験と言語との関連性を明らかにすることによって、美術科における言語活動のビジョンを提示した。分析の結果、擬態語が起点となり深層意識に触れ、多様な視点、価値観を獲得し作品や思考に反映されていたことを示した。経験を通して得られる質感は、言葉との結びつきによって具体的な認識となり、そこで得た感覚はデジタルカメラによって美術的表現へと生成されたことが示された。

## 第 2 部第 3 章の註

- 1) 茂木健一郎，『脳とクオリアーなぜ脳に心が生まれるのか』，日系サイエンス社，1997年，pp. 46-47。
- 2) ジョン・デューイ，栗田修訳，『経験としての芸術』，晃洋書房，2010年， p. 39。
- 3) 同上， p. 274。
- 4) 滝沢武久，『子どもの思考力』，岩波新書，1984年， p. 149。
- 5) 丸山圭三郎，『言葉と無意識』，講談社現代新書，1987年， p. 74。
- 6) 滝沢，前掲書， p. 141。

## 第2部のまとめ

第2部は、美術教育における言語活動を介して得られる質感に関する実践的検証である。

第1章では、第1部の美術教育における言語活動を介して得られる質感に関する基礎理論の研究結果から、言語活動を介して得られる質感に関する授業の構築を行った。その具体として、第1節では、基礎理論より活動への展開を示した。基礎理論では、言語<擬態語>が質感とつながることにより、個々人の深層意識に触れ、作品に質を生むことを論じた。さらに、この流れに適した表現媒体としてデジタルカメラの使用を示した。そこで、この基礎理論を基に授業実践の方法を構築した。第2節では、授業実践としての活動の概観を示した。言語活動（擬態語）を介して得られる深層意識、質感は、他者とのイメージの共有によって、その違いを認識する。意見交換が個々人の内的世界を表出し、デジタルカメラはその意識を定着させる役割を担っていたことを示した。

第2章では、小学校における授業実践の内容とその分析を示した。第1節では、デジタルカメラを用いた小学校における図画工作の授業実践の1つ目とし、小学校第2学年の授業観察より分析を行った。空想の生き物が、目の前に現れた時の反応を身体表現し、そのポーズを教諭が写真撮影を行う。その写真の人物の部分を取り抜きコラージュし、その周囲に絵画表現を行うといった授業内容である。分析内容は、図画工作の授業において、言語を介したやり取りによって日常生活における意識が抽出した場面を基に、授業内における言語の活用を示した。分析方法は、ビデオ記録による会話と行為の分析である。分析の結果、言語は、日常生活と芸術とをつなぐ役割を担い、新たな言葉やイメージの獲得を発生させ、その経験は美術表現を介して個々人の深層意識に触れ、作品が形づくられることを示した。このことにより、美術作品による質的世界が生成されたことが示された。

第2節では、デジタルカメラを用いた小学校における図画工作の授業実践の2つ目とし、小学校第1学年を対象に、授業実践とその分析を行った。実践分析の内容は、デジタルカメラを利用し擬態語で捉えた表情を様々な質感で表現させることで、質感という新しい感覚を意識させることができるか、というものである。分析方法は、ビデオ記録による会話と行為の分析と学習ノートである。分析の結果、小学校第1学年という年齢でありながらも、言語<擬態語>から新たな感覚を意識させ、質感の感受が行われていた。さらに、デジタルカメラは、感受した質感を具体化し美術表現として提示し、作品として成立させていたことが示された。

第3節では、デジタルカメラを用いた小学校における図画工作の授業実践の3つ目とし、小学校第5学年を対象に授業実践を行った。児童は、写真撮影の前に設けた擬態語に対する意見交換において、擬態語の持つ言葉の印象について日常生活を思い起こし、その生活から感じられたことを、差異を持って伝え合っていた。言葉の持つ印象について、撮影前に意識できたことで、撮影時には、撮影対象から感じられる質感に対する意見交換が行われていた。さらに、経験を思い出し、別な撮影場所を推測しそこに向かうなど、擬態語の持つ感じを広範囲より導き選択していた。

第3章では、中学校における授業実践とその分析を行った。第1節では、デジタルカメラによる作品制作において擬音語を用いた中学校美術科授業実践の1つ目として、中学校美術科の作品制作過程における生徒の「体験」に注目し、言葉と感覚的な経験との結びつきが作品に与える役割について明らかにした。言語利用として擬態語を用い、言葉とイメージの結びつきについて分析を行った。分析方法は、ビデオ記録による会話と行為の分析と学習ノートである。分析の結果、言葉の与える広がり、現実のものと合わせ、質感をより実感しながらその感覚を獲得することに至っていた。さらに、美術的手法（デジタルカメラ、写真の切り貼り）を媒介することで、質が変容し作品へ生成されていた。始まりから終わりまで軸となった言葉〈擬態語〉は、表現するための指標となり作品制作における一要素となり明確な目的を築き、感覚的に対象を捉え思考し、比較検討が行われたことが示された。

第2節では、デジタルカメラによる作品制作において擬音語を用いた中学校美術科授業実践の2つ目として、中学校美術科教育における言語活動について、授業実践を通して美術表現における言語の役割について分析を行った。また、美術経験と言語との関連性を明らかにすることによって、美術科における言語活動のビジョンを提示した。分析の結果、擬態語が起点となり深層意識に触れ、多様な視点、価値観を獲得し作品や思考に反映されていたことを示した。経験を通して得られる質感は、言語との結びつきによって具体的な認識となり、そこで得た感覚はデジタルカメラによって美術的表現へと生成されたことが示された。

以上の第2部の美術教育における言語活動を介して得られる質感に関する実践的検証で検証された内容として、小学校における実践では、①美術教育と言語との関連については、美術教育において言語としての擬態語を介在させることは、個人の深層意識や感覚とのつながりをつくることになるということが示された。すなわち、言葉の存在が、個々人の生

活と美術とをつなぐ役割を担い、抽象的で不明瞭な個々人の感覚を具体的にし、他者と比較可能なものとした。擬態語については、小学校において、だれしもが理解可能であることが確認できた。さらに、唯一無二の感覚である質感は擬態語によって具体化され、共通認識のもと他者との感覚における比較を可能にした。②美術教育と質感との関係においては、擬態語を介在させることで質感の取捨選択による感受が可能となることが示された。このことで、撮影対象に明確な意図を持って関わるのが可能となり、写真を撮影することの目的が具体化された。③美術教育における写真という表現媒体を活用することの意味については、言語を介することで質感の感受を獲得させることにおいて有効であるということが示された。本実践においては、写真<デジタルカメラ>の持つ特性である即時性が、有効的であることが示された。また、写真によって質感と言語<擬態語>との具体的なつながりを築き、質感の認識もまた共有可能であることが示された。

中学校における実践の一つ目では、言葉から発生するイメージとそのイメージに合う質感を感受し探究することで、作品に質が発生する場面の考察を行った。言葉の与える広がりには、現実のものと合わさり、質感をより実感しながらその感覚を獲得することに至っている。さらに、美術的手法を媒介することで、質が変容し作品へ生成されていた。始まりから終わりまで軸となった言葉は、表現するための指標となり作品制作における一要素となっていたと捉えることができる。言葉が設けられていることで明確な目的のもと、感覚的に対象を捉え思考し比較検討が行われていた。美術教育において表現媒体との出会いは、価値の発見、感覚的な経験などが上げられる。本実践では、デジタルカメラを媒介することで得られる視点が、体験をより具体的なものとし成立させていた。

中学校における実践の2つ目では、中学校美術科教育における言語活動について、授業実践を通して美術表現における言語の役割を分析し、美術における経験と言語との関係性を明らかにすることによって、美術科における言語活動のビジョンを提示した。美術科教育における言語活動の役割は、次の4点に整理された。①言語活動としての擬態語は、我々の深層意識にアプローチし不明瞭な事物を美術作品として生成させることを可能にした。②擬態語は、対象から得る感覚の言葉への置き換えを可能にし、具体性を持って認識することを可能にした。③擬態語は、グループ活動において、他者との共有を容易にし、会話を発生させた。④美術表現の工程において言語が一貫性を持ち存在することで、生徒にとって表現の目的が明確となった。

全ての実践をグループ活動による写真撮影行為によって発生する質感の感受という視点



で述べると、次のようなことが言える。

観察では、視覚情報のみではなく、聴覚、触覚、嗅覚の感覚が同時に働いている。そこで感じた内容は、質感として感受され、さらに、撮影された写真にはその質感が付随することとなる。環境と状況によって質感の感受は変化する。

グループによる意見交換では、他者の意見によって気づきが発生するだけでなく、意識の表面には出現しない無意識のなかで蓄積されるような内容が発生している。それは、空気や温度を意識せずとも常に感じているといった環境との相互作用である。他者の存在や空気やその場の状況は、感覚にアプローチし途切れることなく感じ続けている。そこで、擬態語を媒介することで、意識されていなかった感覚は意識に上がり、具体性を持って環境・状況の存在と関係を築くことができる。このことによって、質感の感受と作品に明確な関係性が生まれる。

さらに、感じたことを言葉にし、グループのメンバーに伝えることで、自身の感じている内容を確認し認識を強める効果もある。共感や批判によって、質感をより詳細にし、より適切で効果的な表現へ近づけることを可能にする。日常生活や社会においても、他者の意見によって自身の考えをより強固な考えへと変化させるなど、コミュニケーションは自身のもつ不安定な思考を確かなものへとし、自身の思考として安定化させることが可能となる。言葉<擬態語>は、表現の入り口として存在し、他者との意見交換によって共感、批判、異なる意見が自身の質感の感受に響き合い、総合した質感となって意識化される。

美術の授業という環境において、グループ活動という状況は、意見交換を発生させより的を絞った具体的な言葉の交換となり、それが体験となる。痛いという言葉の意味が痛いという体験によって理解され経験となるように、その環境によって実感の伴った直接的な体験とそこで発生する言葉との結びつきは、言葉の意識を重層化し経験化することとなる。

図 28 において、理論構築の際に導出した言語を介した体験の流れについて、授業実践の流れを加えまとめた。外界からの刺激は身体へアプローチし、そこで発生した質感を他者と共有することで、そこに差異が発生する。様々な質を観察し、自身の経験に触れる。このことは、これまでに構築された美的経験によって新たな視点を発生させた。ここに、独自の目線が発生し、美術作品となって形づくられた。

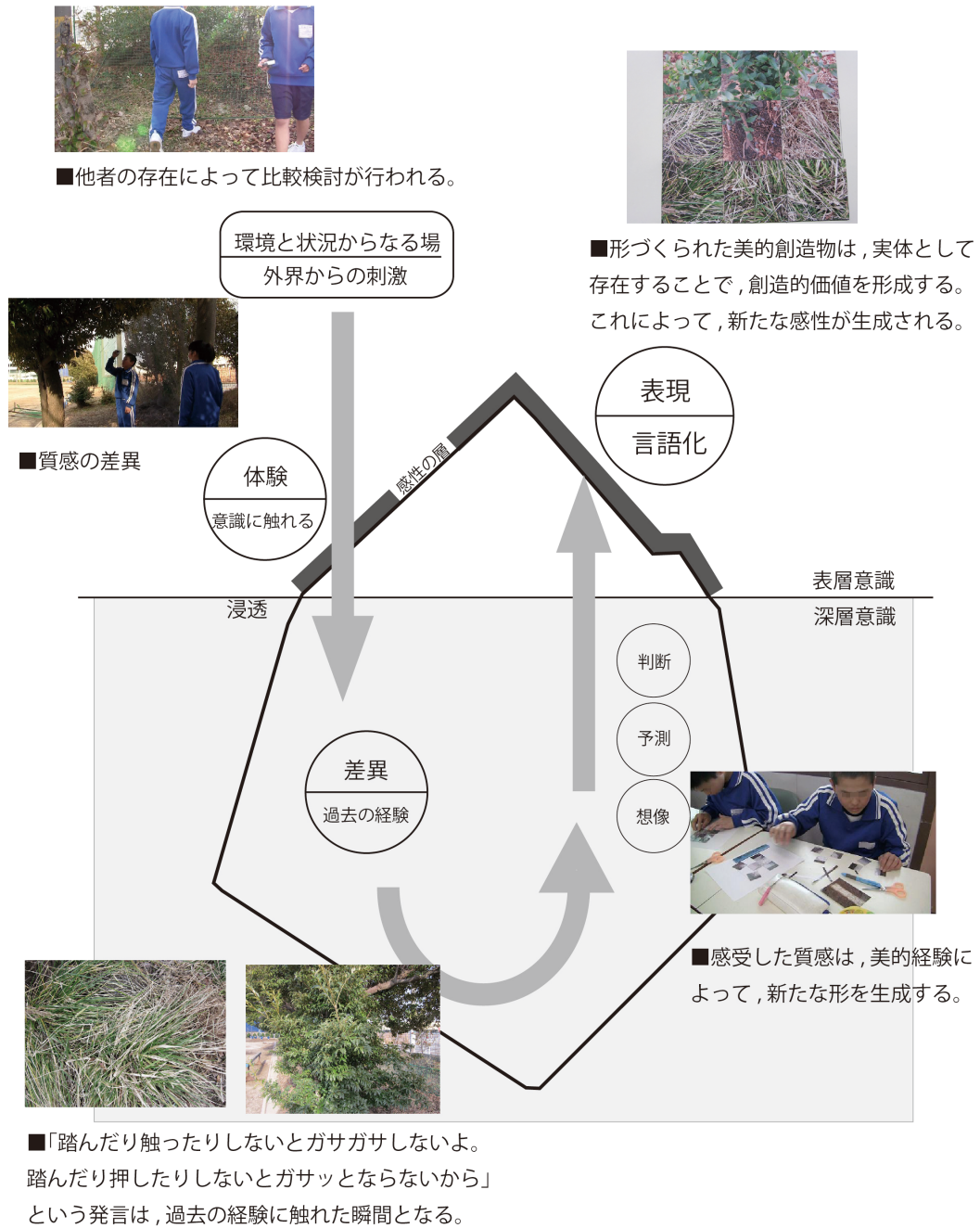


図 28 言語を介した体験の流れ